



営農タイムリー！

発生予察情報について(10月)



2022年9月27日発行

病害虫発生予報第8号(10月)

京都府病害虫防除所より、10月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第8号(10月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
イネ	トビイロウンカ	並
アブラナ科野菜	べと病 白斑病 黒腐病・黒斑細菌病 コナガ ハイマダラノメイガ	並 (やや多) <u>やや多</u> (やや多) <u>やや多</u> (並) 並 (やや少) <u>やや多</u> (やや多)
野菜類全般	ハスモンヨトウ ハモグリバエ類 シロイチモジヨトウ タバコガ類	<u>やや多</u> (多) やや少 (並) 並 (やや少) 並
キャベツ	菌核病	並 (やや少)
ホウレンソウ	シロオビノメイガ	並 (やや少)
ネギ	ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	やや少 (やや多) やや少 (少)

イネ

1. トビイロウンカ

予報内容 発生量： 平年並

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- (2) 9～10月の気温が高いと増殖に好適である。
- (3) 低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。

野菜

1. アブラナ科野菜 ベと病

予報内容 発生量： 平年並 (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) キャベツをはじめ、ハクサイ、ダイコンなどの各種アブラナ科野菜で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

2. アブラナ科野菜 白斑病

予報内容 発生量： 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- (2) 強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- (3) 肥切れすると発病を助長するので、追肥を早めに行う。
- (4) 多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

3. キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）発生終期に菌核が形成され、土中の落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存する。
- （2）適温は20℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- （3）発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

4. アブラナ科野菜 黒腐病・黒斑細菌病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、発生を助長する。
- （2）降雨日数と発生量との相関が高い。
- （3）台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努める。

5. アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。
- （2）雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- （3）雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- （4）被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

6. アブラナ科野菜 ハイマダラノメイガ [ダイコンシンクイムシ]

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）生育初期に加害されると欠株等が生じ、大きな被害になるので注意する。
- （2）株の生長点部を食害するため、被害株は生育が停止し、枯死する場合がある。
- （3）は種直後から寒冷しゃ等で被覆を行い、産卵を防ぐ。
- （4）ほ場を見回り、生長点付近の発生に特に注意して観察し、発生を認めた場合は、直ちに防除する。

7. 野菜類全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量： 平年比 やや多い（前年比 多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

8. 野菜類全般 ハモグリバエ類

予報内容 発生量： 平年比 やや少ない（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。
- （2）幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後速やかに行い防除時期を逸しないようにする。
- （3）施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

9. 野菜類全般 シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量： 平年並（前年比 やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- （2）被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- （3）本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

10. 野菜類全般 タバコガ類 [オオタバコガ、タバコガ]

予報内容 発生量： 平年並（前年比 やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が食入している**トマト**、**ナス**、**トウガラシ**等の果実は処分する。
- (2) 幼虫が果実等に食入したり、また幼虫の齢が進むと防除効果が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期に防除する。
- (3) **オオタバコガ**はナス科、マメ類、アブラナ科野菜等広範囲の野菜、**タバコガ**はナス科野菜を主に加害するとされている。

11. キャベツ 菌核病

予報内容 発生量： 平年並（前年比 やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生終期に菌核が形成され、土中に落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存する。
- (2) 適温は20℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (3) 発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

12. ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量： 平年並（前年比 やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 秋期の気温が高く、雨が少ないと発生が多くなる。特に、雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (2) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。

13. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量： 平年比 やや少ない（前年比 やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

14. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量： 平年比 やや少ない（前年比 少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
- (6) 新系統(産雄性生殖系統)と在来系統の殺虫剤感受性は異なるので、新系統の発生を確認している地域(山城及び南丹地域)では注意する。